

氏名	畠中 香織
学位	博士
専門分野の名称	文化科学
学位授与番号	博甲第 5180 号
学位授与の日付	平成 27 年 3 月 25 日
学位授与の要件	社会文化科学研究科社会文化学専攻 (学位規則 (文部科学省令) 第 4 条第 1 項該当)
学位論文題目	在日外国人ケア労働者における異文化適応
学位論文審査委員	主査・教授 田中 共子 教授 長谷川 芳典 准教授 堀内 孝 保健学研究科准教授 兵藤 好美

学位論文内容の要旨

本研究は、在日外国人の看護師・介護士、すなわち外国人ケア労働者の異文化適応について、心理学的な視点から研究を行ったものである。ケア労働者を対象とした面接調査と質問紙調査、そして彼らと共に働く日本人スタッフを対象とした質問紙調査の結果を分析した、6つの研究から成る。

第1章は序章であり、外国人ケア労働者導入の社会的背景と、介護現場の混乱や問題が論じられた。そして不適応の側面だけでなくポジティブな側面にも注目した異文化適応研究として、外国人と日本人の創造的な協働環境への示唆を得たいという、本研究の目指すところが述べられている。これまでの職業人を対象とした異文化適応研究では、看護・介護分野での就労者を対象とした研究は乏しく、異文化適応への影響要因の検討はみられるが適応過程への実証的解明はあまり進んでいないこと、現場の報告では様々な混乱があって、在日外国人ケア労働者の適応問題が予想されるものの、雇用する施設や働く外国人の関心は、日本語習得や国家試験対策へ向けられがちであることが指摘されており、本研究の意義が語られている。

続く第2章から第9章は、一連の調査研究から構成される。在日外国人ケア労働者の質的調査 (研究 1, 2, 3)、外国人ケア労働者と日本人スタッフを対象とした量的調査 (研究 4, 5, 6, 7) の結果が述べられていく。研究 4, 5, 6 は外国人、研究 7 は外国人と職場の日本人スタッフの双方が分析対象となっている。質的検討から見いだしたモデルを手掛かりに、量的な検討を加えながら、適応の下位構造と影響要因と調べ、適応過程を探索していった。彼らの適応には、心理的適応、社会文化的適応、自己実現的適応という3つの側面とその順序構造が想定された。文化学習は適応の促進や抑制に関わり、職場環境や対人関係では文化的要素の理解が重要な要素となっていた。ソーシャル・スキルの実践は社会文化的適応を促し、ソーシャル・サポートは初期適応に効果を持つと考えられた。そして外国人ケア労働者と日本人スタッフとの間の親和関係は、職業人としての成長を促す面を持つことが示唆された。

最後に第10章では、結論としての総合考察が述べられる。外国人ケア労働者の異文化適応は日本人との関わりの中で進行しており、それが文化学習やスキル習得を促している

考えられた。多文化化が進むケア現場において、外国人ケア労働者と日本人スタッフが互いの文化的理解を深め、信頼関係が構築された協働環境を構築することが求められているといえる。こうした環境を作り出すことで、外国人の知識や経験を活かした質の高いケアである、異文化間ケアの創出に繋がるということが期待されるという筆者の主張が、最後に述べられている。

学位論文審査結果の要旨

審査では、質疑を通じて本研究の意義と問題点、将来に向けての課題が議論されていった。介護の国際化が進む中で、時代のニーズに対応した重要な問題を取り上げており、開拓的で意欲的な研究であると考えられた。従来視点には不足していた、文化の要素への注目と対人的な関わりがケア労働者の異文化適応に重要であることを示し、受け入れ体制や教育の整備への示唆に富んでいる点で、今日的な意義があるといえる。

一方で本文の説明不足の点や誤記の指摘が複数あり、改稿が指示された。概念の設定と検証、モデルの実証性に関する質問や、モデル構成過程の詳細はどうなっているのか、複数の研究から得られた知見をどうモデルに集約していくのか、分析結果はどこまで確実か、調査視点の多角化の必要性があるのではないかとといった問いを巡って、質疑応答が行われた。因子分析の結果の解釈や尺度構成において、課題が指摘された。異文化圏で働く者の視点に立って新たに発見し得たことは何か、今後の実践への見通しはどうか、現在も進行中の研究としての次の展開予定など、発展的な質問もなされた。

申請者は様々な問いに対する見解と見通しを語り、課題を自覚しながら先を見据えた学術的議論を展開する能力の一端を示した。本研究は未熟な部分も持っているが、それは続く研究展開の中で更に精緻化を目指すべき部分といえる。研究手法に関する更なる研鑽は、今後の発展の中で努力すべき課題と位置づけられる。問題の解決に向けて努力を積み重ねていくことで、更なる研究展開の可能性が期待できる。

研究結果はすでに国内外において、日英語で発表されている。国内では日本健康心理学会（6回）、日本質的心理学会（1回）、多文化関係学会（1回）、海外では The Asian Future Conference（2回）、The Asian congress of Health Psychology（2回）、The Global Congress of Qualitative Health Research（1回）で学会発表を行った。査読つき学会誌1本と、本研究科紀要2本の論文が刊行されていて、1本は海外誌に投稿中であるが、成果は広く世に問われている。また学会の賞を3つ、財団の研究助成を2つ受けている。この意味では、主題の今日的な価値と社会的な重要性、研究としての着眼の良さが、学外からも認められている。基本的な研究の計画と遂行の能力は身につけていると考えられ、審査委員は全員一致で、本論文を合格と判断した。